

「時つ風」再攷

新垣 幸得

「時つ風」なる語は、万葉時代、どういふ状況において用いられていた語であろうか。この語の註釈的初見と見られる鎌倉初期以来、今日に至る解釈の経緯を見るに、

鎌倉初期 中期	万葉歌詞 仙覚抄	にはかにふく風也。 ひとしきりあらく吹く風を云也。
吉野時代	詞林采葉抄	時風者大風也。
江戸初期	万葉集管見 代匠記	いつにても其の時々に吹く風なり。 時に随ひて吹く風なり。
中期	童蒙抄 万葉考	疾風也。はげしき風のこと也。 うなしほの満ち来る時は必風の吹きおこるをときつ風とはいへり。
後期	攷證	こは思ひよらぬ時に吹き来る風をいへる也。

上の一覧は各期の代表的な見解を上げたのであるが、鎌倉、吉野時代は、「ひとしきりあらく吹く大風」をさしていたのが、次の江戸時代初期には「その時々々に随ひて吹く風」説に変わって来た。

ところが江戸中期になると、二説に分かれ、一つは童蒙抄に代表される「はげしき風」説と、一つは考に代表される「うなしほの満ち来る時必ず吹きおこる風」説とに変わって来た。しかし江戸後期になると、攷證によって、考の説、「ここに叶はず」として人麿の二二〇番歌を中心に厳しく批判した。だが考の説は江戸中期以来、略解や後期の古義等に支持され、現在に至るまで多くの支持層を持つようになった。⁽¹⁾

二

「時つ風」の吹く環境を詠んだ歌詞は夫夫次の四首存する。

(1) 讃岐の狭岑島に、石の中に死れる人を視て、柿本朝臣人麿の作る歌一首并に短歌(部分抽出)

……中の水門ゆ 船浮けて わが漕ぎ来れば 時つ風 雲

居に吹くに 沖見れば とる波立ち 辺見れば 白波さわ
ぐ 鯨魚取り 海を恐み 行く船の 梶引き折りて をち
こちの 島は多けど 名くはし 狹岑の島の 荒磯面に
いはりて見れば……(2・二二〇)

(2) 大式小野老朝臣の歌一首

時つ風吹くべくなりぬ香椎潟潮干の浦に玉藻刈りてな

(6・九五八)

(3) 撰津にして作る

時つ風吹かまく知らず阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな

(7・一一五七)

(4) 別れを悲しぶる歌

時つ風吹飯の浜に出で居つつ贖ふ命は妹が為こそ (12・三
二〇一)

これら四首の歌詞の「時つ風」を明治になって木村正辞博士の美夫君志が「考に潮の満來る時に吹來る風なりといへり」より始まり今日までおよそ一八の註釈書のうち一六は「時つ風」を満ち潮に伴って吹く風、又は干満に先立つ風としてゐるが、残りの二著、講義と古典大系万葉集は潮汐に関与してゐない。

以上一八の著書は、現代碩学の高著として万葉研究には欠かせぬ書であり、外にもこの語に關しての研究論文がないとは言えないにしても、この諸註書は現代の学界の傾向を知るに足ると思われ、しかも89%対11%で圧倒的に潮汐に關与して起くる風とするのが高率を示している。

然らばこの説が正鵠を得ているかというに異論なきを得な

い。先ず右に對する古典大系の説を見るに、「時風、時を定めて吹く風」(二二〇)、「季節によって吹く風、季節風か」(九五八)「季節、時刻によって吹く風」(一一五七)として季節風説を立てられてゐる。

しかるに新説と見られる季節風は、大陸と大洋の間に起くる規模の大きい現象で、冬は大陸の寒帯気団は北西季節風となつて日本を吹きぬけ、夏は太平洋の熱帯気団が南東季節風となつて日本を吹きぬける卓越風をさし、夏の季節風は四月頃から起り始め、六月に至つて充分発達し、冬の季節風は九月頃から始まり十一月には充分発達する。いわば半年毎に方向が變る。

「時つ風」が「時を定めて吹く風」である場合、地域的に或る地域と時間に局限されなければならない。その理由は「時つ風吹くべくなりぬ」、「時つ風吹かまく知らず」に状況を窺うことが出来るのである。又季節風は時間的に必ずしも一定して吹くとは限らないから、この場合季節風である可能性は少ないと思われる。

講義は、代匠記、童蒙抄、考、攷証等の説を採り上げ、攷證の「思ひよらぬ時に吹き來る風ならば時つ云々といふべき理なし」としこれは略契沖のいへるが如くなるが、(契沖は「時つ風、時に随ひて吹く風なり。下に時風と説める歌ども、いかさまにも、春にまれ、秋にまれ、微風を云ふ事とは見えす。意を著くべし。」といつてゐる。)意稍異にしてその時に當りて吹く風ならざるべからず、而してそは相當に著しき風なるべきなり。卷六に「時つ風吹くべくなりぬ」といへるは、その吹くべ

き時の予め知らるるによりていへること考へられ、又巻七の「時風吹麻久不知」といへるも同義なりと見ゆ」とし「その風の強かりしことは下の詞に見ゆるが、人麿その航海せる時に当りて吹ける風なるべし」(二二〇)と述べられたことは、卓越した見識として間然するところもないが、「時つ風」の性質には立ち入っておられない。

三

われわれは諸先学の説に卓越した見解のある事を知ったがなお問題解明の点を、氣候、氣象現象の方面から検討して見たい。

(1)(2)(3)(4)の四首は(1)を除けば、皆海岸地帯に關しての作だと見られるし、それは博多湾、大阪湾を中心としたものと思われ(3)る。

(1)の人麿の挽歌の場合、讃岐の国、中の水門、現在の丸亀市西南、諸説に云う中津(金倉川)の津から瀬戸内海を西から東へ、おそらくは帰途につく旅であつたと思われる。

ところが沖に漕ぎ出して程なく海上は只ならぬ様相を呈して来た。「時風雲井に吹くに」は恐らく台風の圈内に入つての強風か若しくは暴風であろう。というのは、船出は一般に干潮時よりは潮時を見て出すこともあるが、台風は必ずしも潮時に合せて吹くとは限らない。大風が空を吹き上げて台風が追つたことを知らせ「跡位浪」、うねりの大波が船を危うくしているのである。「跡位浪」が「うねり、撓み立つ波」であるとするとするなら

ば、(4)「うねり」が問題になつて来る。「うねり」は台風又は非常に強い低気圧によつて起こるといわれるが、波長は百米以上に及び十数秒の周期で規則正しく、現に發生している台風の中心から放射状に顯著に伝わつて来るもの、即ち襲来する台風を告知するものと、台風の暴風によつて起こるものとが考えられているが、この場合は「時つ風」が空に吹き荒れている模様からすれば、暴風圏に入つている可能性が強い。

次にこの「時風」が台風であつたかどうかを判断する材料としては、純日本紀大宝元年八月二日に讃岐、伊予、安芸、周防、長門、備前、出雲、伯耆、但馬等、四国中国の外、紀州、近江、越前、佐渡等一七ヶ国に渡つて大風があり、「百姓の廬舎を壊り秋の稼を損なふ」とある。人麿が作歌活動を始めたのは、天武朝の初めでは勿論ないであろうが、彼の死が和銅元年から三年の間という諸説から考えても天武・和銅三年間はせいぜい四〇年足らずである。その間四国地方を襲つた暴風を日本氣象史料(田口竜雄氏)から調べて見ると、右の大暴風に先立つ八月一四日に播磨、淡路、紀伊諸国に大風と高潮が襲つて、田園損傷の記録が一つある(6)。台風の進路方向から見ると的を得ていない。遭難者の漂着、海上の荒模様、避難状況から見ると讃岐方面を直撃した暴風の公算が強く、その時の強風が「時つ風」であつたと考えるのが穩当であろう。「文学の言語」とは、もつと対応的、状況的言語である」と中西進博士は説かれて(7)いるが、この場合正に至言の感がある。

四国を北上する台風は、室戸崎方面が最も多く台風上陸の経

路になつてゐるが、ここを通れば讃岐方面に影響があることは、四国上陸の台風が主として四国、中国、近畿を通過することを証している。台風を中心気圧が900mb以下の台風は風速55m/s以上の暴風を伴つてゐるので、海上航行中の船舶は嚴重な警戒が要求されるといわれる。人麿の場合は後述の「時つ風」が600米位の低空であるのに、台風は上層雲の方向に進むので「時風雲井に吹くに」と上空の雲行きの荒貌と、うねりの状況が「海乎恐」に現われ「梶引折而」という緊急の動作によつて陸地近くの安全な狭岑島蔭に避難して仮庵を営んで船泊りして台風の通過を待つていたのであろう。

この場合は突風ではなく矢張り台風の様相と思われるのは、「風信考」に「颶は常に驟に発り、颶は則ち漸有。颶は或は瞬発して倏に止む。颶は則ち常に日夜を連ね或は数日にして止む。大約二三四月発生する者は颶となす。五六七八月発生する者は颶となす」とある。中国本土と琉球間の往復による航海法に精通した見解として、この書は意義深い。人麿等の災難も八月二一日ならば陽曆の九月二、七日に當る。台風の特異日は八月二八日、九月一七日、九月二六日前後だと云われるから人麿等は奇しくもこの台風に遭遇したものとと思われる。

右の期間を裏付けるためにも、人麿は「夏草の野島崎」(3・二五〇)は盛夏の頃で、彼は、舒明、斎明や額田王の故地を孰田津のいはゆ(道後温泉)に訪れ、その帰途ではなかつたかと想像されなこともない。野の上のうはぎは、すでに老葉で食用には堪えないが、せめて遭難者に供養したいという彼の悲痛

な弔辞でもあった。

四

次に(2)の小野の老の香椎潟の「時つ風」が(3)(4)とも関聯して最も重要な意義を持つことは争えないが、なぜ大宰府の官人等は香椎廟に十一月に奉拝したのか、恒例の祭例奉拝のためか、又は永く豊前守だった字努首男人の選任による送別のための香椎廟参拝だったのか、それは「香椎宮編年記」を披見するに、

「神龜三年五月二日託宣」(以下略記)

「天平宝字四年正月年中行事祭ヲ定ム昔ヨリ今ニ至リ当神主ハ日日沐浴ノ斗盛ノ御饌ヲ三膳毎朝献シ来ルハ先例ノ如シ」とあり、以後正月元旦以後供献の儀が行われ、「二月一日朔ヤフノ供ヲ献ス醯ハ菜二種汁一種酒三献ナリ、三日朔ヤフノ供ヲ献ス五日伶人ノ舞アリ。(中略)六日二斗四升ノ供ヲ古宮ノ神前ニ献メ正忌ノ祭ヲ行フ坊中輪次ニ酒ヲ祠官中エ進ル毎毎年ナリ、此日大宰帥以下国司郡司本宮エ詣メ再拜メ帥奏スラク帥ナキ時ハ大小武ノ中、明神等大八島圍知志々倭根子天皇太前齋大宰ノ帥某ヲ率ニ司々人止毛恐美毛奏賜被久止奏シテ再拜而段メ退出ス又武内社ノ前ニテ再拜メ退ク毎年此日ナラビ二十一月六日如此。」

とあつて此の日は「毎年宮崎ノ海人四十八尾ノ紅魚ヲヨビフカノミガキ四十八連酒団榎四十八器ヲ四党ニ献ス」とある。(中略)又夕志賀ノ白水郎男十人女十人風俗舞を神楽所に奏するが此の例も毎年此の日と十一月六日に同じ」とある。「諸神

根源抄」にも「十一月六日の冬の祭と二月六日の春の祭には大宰帥以下筑前ノ国郡司以上が奉拝した」事を記すといふ。

右の記事によれば、天平宝字四年の行事を定めたのは先例の如しとあって、先例に慣って行事を定めたものと官司側も述べているので、大宰帥が国司郡司等を率いて香椎廟に奉拝する事は重要な年中行事であったと思われる。それは「冬十一月大宰官人等奉拝香椎廟」という題詞から推しても十一月六日である事は明らかである。要するにこの奉拝は、香椎廟おける重要祭祀のための参行が目的であって、宇努首男人の国司遷任の送別のための奉拝ではなかつたのであるが、たまたま遷任の運びがその時になったので男人が伺候したものと見なければならぬ。奉拝後の述懐惜別となつたものであつた。

冬十一月は、神龜五年と見るのが諸説の一致するところ、その十一月朔日は陽曆の十二月六日に当る。したがって帥以下の香椎廟奉拝、十一月六日は陽曆の十二月十一日に当る。十一日の干潮は午前九時一〇分と二時二六分、干潮時の水位は午前が七五糎、午後が八二糎で満潮は午前二時五〇分と午後一五時五二分である。とすると、旅人が香椎潟に「袖さへぬれて朝菜」を摘もうといい、小野老が「時つ風吹くべくなりぬ」といふ「潮干の浦に玉藻刈りてな」と詠んだのは、午前九時を過ぎた頃と見られる。その頃は干潮時の最高潮でいまだ満ち潮時ではないのである。後述のように福岡は午前九時が海陸風の吹き始めになっているのである。海陸風は午後三時頃が最高潮だから上げ潮時に風は吹いていた事は事実であるが、満ち潮時に必

ず海風が吹くかというにそうではないのである。

それは漁師も、海岸の船舶業者も、多くの科学者も否定するのである。ではどういふ風が吹いて来るかという問題である。以下関係者の証言や、科学的実験資料や、稿者の実地検証の結果等について述べて見たい。

五十年九月、香椎潟方面、博多湾、志賀島を訪問の折、志賀島漁業組合の漁師船越貞雄氏六〇歳を通じ同漁業組合の宮本鹿雄氏が土地の関係者や古老の意見をまとめて報告された記録によれば、アサガラとは冬の大潮の干潮時のことをいい、時間的には午前三時頃になる。又日和(晴天で風の日)時のみに吹き込んで来るので、「時つ風」とはアサガラに吹き込んで来るので、北西季節風とは少し意味が違ふ。冬の大潮は午前中、春には午後が潮が引く各地によって潮の動きは異なり呼び方も違っているが「満ち込み時に必ず風が吹くとは限らない。」という。又福岡県糸島郡志摩町野北の成富哲夫氏五五歳は「九月末日から北風が吹くが、潮の満ち干と風との関係はない。」といわれた。(二月二十九日)

稿者は五十年十二月二十日大潮も峠を越した頃、香椎潟を訪れ午後四時頃より香椎海岸、今は片男佐のみが香椎海岸の入口の一部として松原の下が海岸で砂浜を歩くことが出来る。香椎宮の前は埋立てになっているが一部残っている。東方背後は浜男及び香住丘になり深く入り込む内海は博多湾中湖、対岸は志賀島に通ずる海の中道の低丘地で香椎線が通っている。片男佐の浜はヘドロの海と砂浜に区切られ、浜の松林のすぐ近くまで

青のりが打ち上げられ、緑の線を画いて大潮だった模様ははっきりわかる。午後の干潮はさほどでない。偶福岡市東区浜男本通の船越勉氏六八歳に会い、最近にない大潮だったという。

当日午後の干潮は一六時四一分度夕風の時であった。二時間後に満潮に変わったが無風状態であった。同日香椎歌壇なる館に泊り、翌二一日午前四時半起床、外は暗いが引潮の模様が薄くわかる。五時二〇分雨になり傘をさして薄暗がりの中を片男佐まで行く。人通りはまだない。土地の事情を聞くにも仕方なく夜の白く明けるのを待って、片男佐の松原近くの浜にいと、潮はすっかり引いている。ヘドロの海の中を股長の靴にはきかえて浮き浅橋を引く作業をしている人がいる。それはこの土地に一七年ボート業を営む金内茂氏五五歳であった。先方は暗いうちから稿者が監視していると思ひ不審に思ったという。事情を話し、潮汐の状況の説明を求める。「潮の満ち時に風が吹くという事は確かにない。場合によっては突風がある。それは天候の具合⁽¹⁶⁾」と話しているうちに潮がさして来た。上げ潮だが風がない。午前七時一五分浜まで五・六程満ちかけて来たが却って静かである。午前七時半潮は砂とヘドロの境までやって来たが風は殆んどなく風である。白サギが一羽磯の水辺にとまっていた。黒い鳥が飛び去った。相当に寒いが白い浜千鳥が磯で群れている。上げ潮の模様がゆっくりと小波を立てて来るが風はなく実に静かな海になった。天は黒雲に覆われているが志賀島の方は晴れている。日本海側が晴れて玄海側が黒い雲に襲われ、むしろ背後の香住の方から微風が吹いて来る。今海岸に立

って満ち込む時に風が吹くという実証はない。七時四〇分上空の雲は西から東へ流れているが、こは風はない。午前八時浮き浅橋は潮に埋まり、先まで露出していた海岸の浜は潮に満ちて来た。志賀島南西方はなお黒雲に覆われている。午前八時禁猟区で鴨が浮いている。風は全くなく静かに潮は何ともいえず、ゆったりと漸く浜際まで満ちて来た。(実況観察記)

次に福岡管区気象台調査課、小島隆義氏は、「大潮、小潮と風との関係は直接ない。」「北西季節風と干潮時間には殆んど関係がなく、潮が満ちて来る時にそれと逆風が吹くと潮位が低くなることはあっても、潮の満干と北西季節風とは先ず無関係と思っておられた方がよろしい。」と質疑に答えられ、風速の日変化と干満時と風速変化の調査資料の提供をうけた。それによると、風は昼間特に午後三時前後が最強であり、干満時の風速は殆ど一直線で風と干満時とは無関係である事が証明された。⁽¹⁷⁾

五

田口竜雄氏(日本の風)は、「時風は海陸風が時を定めて吹き始める事に関するもの」という藤原咲平博士の説が適切とされたが、藤原博士は表題の(2)(3)(4)の三首を挙げて、「此の時代の時風は海岸に吹いて、恐らく朝とか夕とかに時を定めて吹き出すもののやうに見え、して見ればこれは今いう所の海風陸風の事と思われる。」⁽¹⁹⁾としている。

海陸風の理論については、多くの気象学者によって論ぜられているが、集約して言えば海陸の気温、気圧差によって生ずる

現象である。昼間は日射を受けて海陸共に温度が昇るが陸地の方が熱の伝導力が高いためにより高くなる。ために陸上の空気は膨脹して押し上げられ、上空の等圧面は陸上から海上に向って傾き空気は海の方へ流れ出す。その結果海面では気圧が増加し、陸面では減少する。そのために海面から陸面に向って風が吹き出す。これが海風である。日没になると海陸温度の差が消え失せ、空中の等圧面は地球の表面と平行になり、気圧傾度がなくなるから風は止んで夕風になる。然し夜が更けるにつれて、陸地は海面よりも急速に冷却するので今度は逆に等圧面が海の方から陸に傾いて、海の方から陸に向って気流が流れ、陸面の気圧が増加し、海面が減ずるから地表面では陸から海の方へ向って風が吹く。これが陸風で、日の出頃等圧面が平均して風は止み朝風となる。こういう現象を海陸風といっている⁽²⁰⁾。

海陸風が発達するのは、海岸近くに台地や丘陵が平行して続いて横たわっている所が特に顕著だといわれ、大阪湾沿岸、阿波、讃岐、瀬戸内海地方を挙げているが、又琵琶湖の如き大きな湖の湖風も同じ現象だといわれる。そういう点から見れば、香椎潟は背後に丘陵があり、志賀島へつながる低台地が湖水状をなし、海陸風の発生地として好条件であると思われる。(3)の撰津作の阿胡乃海や(4)の吹飯は、現在の大阪府和泉岬町深日の内海と見られ、これ等の作品も海陸風の適地であることは疑いない。海陸風は大気の下層の現象で海風の高さは六百米、陸風の高さは五百米位で、その陸地に入る巨離は普通沖合七乃至九杵の所から吹き込み、陸上は二十乃至三十杵の巨離まで侵入す

るといわれる。従って稿者が香椎潟で体験した高空の雲行きは北西季節風が吹いていることを意味している。又海陸風は、熱帯地方では四季共発達し、起る時が常に規則正しく毎日寸分吹き始める事時計になる位だとい⁽²¹⁾。海陸風が「時つ風」といわれる所以である。この現象は、低緯度に著しく高緯度に行くに従って緩やかになるといわれる。海陸風は又、日本全域を包む様な全般的な気圧配置が比較的一様で気圧傾度が弱く、風の穏やかな場合に陸の昼間の温度差に起因する事は前に触れたが、全般的風系が強い場合は打消されて成立しない。人麿の場合に「時つ風」が吹く頃に船出したとしても、台風によって打消されてしまっているのである。日本では、春秋の移動性高気圧に覆われた場合と、七八月頃小笠原気団に覆われ、快晴か薄曇りで気温が上がり、夜間は放射冷却が顕著な場合に発達する。そうして海陸風の強さは所により7m/sに及ぶ所もあり、一五時頃が最も強いことは小島氏のデータにも示されたが福岡地方と大阪湾の海陸風の状況を高橋浩一郎博士の検出表によって示す次の通りである。

地点	吹き始め	吹き終り	風向	風速 m/s	最強時
福岡	9	19	北北西	5	14
大阪	10	22	南西南	7	14

この様に見て来ると「時つ風」は潮の満干には何等関係しないことが明らかになる。偶干潮時が海陸風の吹く時間と重なる

事はあっても、潮の満干は普通四、五〇分づつずれるから同時的とは言えない。従って「時つ風」はその状況を全く合理的に表現したものであって海陸風を指すことは明らかであろう。諸家が「時を定めて吹く風」であることを認めながら、それが潮の満干と結びつき、海洋と陸地の昼夜の気圧気温の差や地理的条件等、海陸風の機構を考慮しない結果であった。以上述べ来たったことよって海陸風の理解が得られることと思う。

(五一・八)

高木・久松両先生は超人的であられ名実共に会長として直接に上代文学会員を御指導になり、その学恩は高く深く、われらにまで及びました。ここに御霊みたまに拙稿を捧げる次第であります。

注(1)拙著「万葉集の風土文芸論」所収。時風攷参照。

(2)和達清夫監修「日本の気候」一二頁〜三一頁。岡田竹松博士「増訂改版気象学講話」一三八頁〜一三九頁参照。

(3)香椎潟は博多湾。(3)(4)も撰津・住吉・和泉深日に属す。

(4)文学十卷十号昭和十七年十月号、北条忠雄氏「跡位浪」考。

(5)斎藤鍊一博士「新訂海上気象学」二二六頁。

(6)「続日本紀」大宝元年八月十四日の条。

(7)「万葉集原論」三〇二頁。

(8)「台風経路図三十年集」一三三頁参照。気象協会発行。

(9)前掲書一四頁右段。

(10)高橋浩一郎博士「総観気象学」二九〇頁風の日変化参照。

(11)「指南広義」同書は琉球国中山王府進貢大夫程順則著。

(12)前掲書「台風経路図」三十年表五頁参照。

(13)「九州の万葉」一〇五頁。春日氏は「遷任の挨拶に伺候した豊前守宇努首男人を送るため」とせられた。

(14)香椎会報二号。

(15)博多湾潮汐表。

(16)金内氏は海軍船舶兵だった関係で詳しい説明があり、恵まれた機会であった。

(17)拙著前掲書一三五頁グラフ参照。

(18)「日本気象学史」一七頁。

(19)「天文や気象の話」一六八頁。

(20)岡田竹松博士「気象学」二二頁。高橋浩一郎博士「総観気象学」二九八頁等。

(21)前掲書「気象学」同頁。並に関口武氏執筆「気象事典」参照。

(22)前掲書「気象学」二二六頁。